

心理学的側面からみた卒業生の人生満足度調査－関西学院大学の教育力－

研究代表者 文学部・教授 成田健一

今年度は、昨年度収集したデータの整理、分析、報告書作成を主として行った。ここでは昨年度実施した調査そのものも含め、本研究の概要全体を示すこととしたい。

【問題と目的】

本研究は、関西学院大学卒業生を対象として、主観的な評価という観点から、1) 現在の基本的な属性および社会経済的状态、2) 大学在学時の様々な経験や大学に対する評価、3) 現在の心理的な状態・特徴、の3点を調査した。特に1) 社会経済的状态や3) 心理的状态に今おかれている卒業生が、2) で示した過去の学生生活をどのように捉えているのか、という点を明らかにすることで、関西学院大学の教育的効果・教育力を示唆し、今後の関西学院大学の教育・研究、そしてそのあり方を模索する中でも重要ではないか、と考えた。

【方法】

①調査対象者：関西学院大学の全卒業生約20万人の中から、2008年3月卒を起点に5年毎に1938年卒業まで15階層を選択した。2008～1953年までの12階層(新制大学に相当)は卒年・学部ごとに1/4を無作為抽出し、1948～1938年の3階層(旧制大学に相当)は旧制専門部、大学予科等も含め卒業生全員を対象とした。この手続きで抽出された対象者は7,605名であった。後述する郵送調査の結果、調査票到達者は7,508名であったが、最終的な回答者は3,247名となった(回収率43.2%)。

②調査票：調査票の構成は大きく3つに分かれていた。第1に卒年・卒学部・生年月・性別といった基本属性および住居地・家族構成・職業・収入等の社会経済的状态に関する質問である。第2に、関西学院大学在学時の生活充実度、正課・正課外活動への取り組み等、在学時の経験と評価に関する質問である。第3に、現在の健康・幸福感、性格特性、社会的関わりといった、現在の心理的特徴に関する質問である。

③手続き：上述の通り、郵送調査を行った。本調査の調査票送付(2009年7月13日)に先立ち、約2週間前に調査の予告状を送付した。本調査の〆切日(2009年7月31日)の5日後に督促状を送付し、約3週間〆切を延長した。最終的には2009年11月2日まで

に返送された調査票を対象とした。

【結果と考察】

本研究結果の詳細に関しては別途作成した報告書に示す。ここでは、①人生満足感、②関学経験の評価と人生満足感、③私にとっての関学、の3点に絞って論じる。

①人生満足感

「私は自分の人生に満足している」など5つの質問に「1.非常にあてはまる」～「7.全くあてはまらない」の7段階で評価し、その合計点を尺度得点とする“人生満足感尺度”で人生満足感を測定した。人生満足感尺度の得点範囲は5～35点で、一般的平均点は20～24点であった。今回の全体の平均得点は22.39点で、一般的な値の範囲でやや高い値であった。人生満足感を、卒業年毎に区切って検討すると、人生満足感は、卒業年が新しい群（たとえば1988～2008年に卒業した群）で相対的に低く（22点程度）、卒業年が1958年以前の群で相対的に高かった（23点程度）。卒業年の効果と加齢の効果を分離できないが、古い卒業生ほど幸福感が高いという結果は興味深い。

②関学経験の評価と人生満足感－「関学で過ごしたこと」の現在への影響

「関西学院大学で過ごされたことはあなたの人生に総じてどのような影響を与えたと思いますか」と尋ね「1. プラスになっている」～「5. マイナスになっている」の5段階で関学経験について総合評価を求めた。その結果「プラス」と「ややプラス」というポジティブな評価は総計90%以上となった。

次いで関学経験の評価と人生満足感の関係を検討した。関学経験をマイナスとネガティブな評価をした人は人生満足感尺度が17点程度である一方、プラスとポジティブに評価した人は23点程度であった。つまり、関学経験の評価が高いほど人生満足度が現在高い、という結果である。大学時代には良いことも悪いこともあっただろうが、それを今、プラスと捉えるほうが現在の人生への満足感が高いのである。もちろん直接的因果関係には言及できないが、過去をポジティブに捉える方が現在の満足・幸せに繋がるのかもしれない。

③私にとっての関学

文章完成法の手法を援用し「関西学院大学で過ごしたことは、私にとって（ ）であった」という文章を示し、（ ）の中に文の記入を求めた。その結果、自由回答では異例の3,000を超える回答が得られた（回答率94.5%）。

これらの記述について語彙分析を行ったところ、語句の出現頻度が高かった語は、品詞の種別を問わず、重要あるいはポジティブな意味を持つ語であった。それぞれの品詞間の

関係でみると、「有意義」→「時間」「経験」「思い出」、「楽しい」→「時間」「人生」「青春」「思い出」、「貴重な」「大切な」→「時間」「友人」、など、出現頻度の高い品詞同士の組み合わせで記述されることが多かった。例として「時間」の記述でみると「人生は自分の足で切りひらくものだと教えられた時間（2008年経済学部卒）」「新たな友人づくりと幅広い知識を吸収できた時間（1978年商学部卒）」などがあった。

また、本学での教育効果を考えるときに気になる係り受けの組み合わせとして「身につける（20）」を取り上げ、具体例を下に示す。

「幅広い教養を身につけ青春を楽しむこと（1948年経済学部卒）」

「社会に出る前の適応力を身につけた時期（1953年社会学部卒）」

「幅広い教養が身につけ、クラブ活動を通じて協調性・リーダーシップをみがくよい期間（1978年法学部卒）」

「生き方、考え方の土台を身につける場（1983年文学部卒）」

「当時は意識しなかったが、その後の生活・仕事の基礎となる事を身につける期間（1998年商学部卒）」

「知識や教養、幅広い視野を身につけること（2003年経済学部卒）」

これらは卒年・卒学部に関わらず見られ、大学教育本来の目的である「教養」や「専門知」から「対人関係」の修得等、成熟した大人・社会人の基礎となる様々な力があげられた。「習得」「得る」「培う」といった「身につく」と類似の表現も含むとさらに広がった。今後、「私にとっての関学」の記述と心理的状态との関係もさらに検討が必要である。

【総合論議】

本研究の結果から、回答者の多くが本学に在学した4年間をととても大切に、ポジティブに捉えていることがわかる。特に、卒年が古い高齢の卒業生ほど、また在学時の経験を肯定的に評価する方ほど、それぞれ人生満足感が高いことも示された。

この結果から本学での教育効果を高らかに歌い上げることも可能であろうが、同時に回答者のバイアス（関学に対する動機づけなどが高い）に依存した可能性も否定できない。また一時点の調査であるので、時系列的な変化による因果関係を追うことはできない。このため、異なったサンプルに対する調査、継続的な変化を追う調査、等を今後実施することで本研究結果の価値をより向上させられるだろう。

いずれにせよ、今後本研究で得られたデータについて継続的にさらなる分析を加える必

要がある。関西学院大学の持つ教育力が、人生満足感を中心とした人間の生涯発達の諸相にもたらす影響について、心理学的な諸変数を用いて明確にしていきたい。

参照：『心理学的側面からみた卒業生の人生満足度調査－関西学院大学の教育力－』

（2011年3月15日 関西学院大学卒業生調査2009プロジェクト 成田健一（関西学院大学文学部心理科学研究室）